

竹内泰宏

第三世界の 文学への招待

アフリカ・アラブ・アジアの文学・文化

御茶の水書房

第三世界の 文学への招待

アフリカ・アラブ・アジアの文学・文化

竹内泰宏著

御茶の水書房

著者紹介

竹内泰宏（たけうち やすひろ）

一九三〇年東京に生まれる。東京大学経済学部卒。一九六七年第一回河出長編小説賞受賞。

〈小説〉

『希望の砦』（長編小説）（一九六九）『人間の土地』上・下（長編小説）（一九七六）『少年たちの戦争』（長編小説）（一九九二）『見張り』（文学賞作品集）（一九六三、以上河出書房新社）

〈文芸評論〉

『視点と非存在——二〇世紀文学批判』（一九六二、現代思潮社）『創造的空間』（一九六八、せりか書房）『境界線の文学論』（一九七二、河出書房新社）『アジアのなかの日本文学』（一九七四、筑摩書房）『第三世界への想像力』（一九八〇、現代書林）『アジア・アフリカの文学と心』（一九八〇、レクルス文庫）

〈アジア・アフリカ文学〉

M・クネーネ『太陽と生の荒廃から』（共訳）（一九八〇、アンヴィエル）M・クネーネ『アフリカ創世の讃歌』（共訳）（近刊、人文書院）

第三世界の文学への招待

発行 一九九一年十一月二十日 初版第一刷

著者 竹内泰宏

発行人 橋本盛作

発行所 株式会社 御茶の水書房

〒113東京都文京区本郷五―三〇―二〇

TEL 03 (5684) 0751

振替 東京8―14774

印刷 株式会社平文社 製本 東洋経済印刷株式会社

ISBN4―275―01446―4 C0098 Printed in Japan

まえがき

この本はラテン・アメリカをのぞく第三世界の文学を、その背景となる文化や政治との関連にもできるかぎり触れながら、日本の読者に紹介することを目的としている。

この本の内容は、大きくわけて二つの部分から成りたっている。その一つは、「アフリカ文化の使者マジシ・クネーネ」(第I部)におさめた、南アフリカの詩人クネークを中心とした訪日記や対話や評論による、アフリカの文学・文化の紹介の部分である。ここで、私は、このアフリカ詩人の訪日に際しての言動や、かれによるアフリカ伝統詩の朗読リサイタルや上演パフォーマンス、それをかたちづくっているアフリカの芸術思想などをつうじて、日本文化とヨーロッパ文化とも比較しながら、訪日記というエッセーのかたちでアフリカ文化の特質の一端を日本の読者に伝えようとした。また、その際にクネーネのおこなった対話やアフリカ思想についてのエッセーや、私のクネーネ論も加えてある。

クネーネが「アフリカ思想体系の背景」で伝えてくれているアフリカ思想には、人の生存が自己と他人たちとの共生としての関係にあること、そしてこの共生としての関係は人と人との関係にとどまらず、人と自然、人と宇宙との関係にまでおよぶことが語られている。ここで述べられているアフリカ人の宇宙的秩序の考え方は、ヨーロッパとはちがった家族についての考え方についても、人間平等

の考え方についても、今日必要な多民族共生の思想についても、そしてなにより「産業化の怪物」(クネーネ)による今日の工業文明のつくりだす環境破壊にたいしても、その宇宙の循環の考えによつて非常に興味のある、しかも重要な思想を、ヨーロッパ思想への厳しい批判をつうじて私たちに示してくれている。(このアフリカ宇宙観は、クネーネの最も新しい長編叙事詩であるアフリカ創世記神話「アフリカ創世の讃歌——アフリカ女性に捧げるズールの叙事詩」に、人間と神々と動物たちのつくるドラマとして興味深くえがかれており、近くその邦訳を出版の予定であるから、ぜひ参考にしていただきたいと思う。)

第三世界の文学は、日本ではともすれば見落とされがちなことだが、アフリカでもアラブでもまたアジアでも、口承文芸の広く民衆的な基盤の上に成りたっている。クネーネは、この現代文学をも包み込み、その母体となっていて、音や声や身ぶりとも結びついて生きている、口承的で共同体的なアフリカの伝統文化やその思想的背景を、芸術表現としての実質とともに伝えてくれる貴重な使者であり、これらのものを現代の芸術の創造のなかに生かそうとしている、代表的なアフリカ詩人である。同じアフリカの作家グギ・ワ・ジオンゴも言っている。——「文学、歌、踊り、説話は、自然のさまざまなエネルギーを役立たせる闘いに際して、人びとが自己」、ならびに自己の位置について抱くイメージを具現するものです。そこで、植民地主義は、アフリカ人が自己について抱く個人的ならびに集団的イメージを一貫して抹殺しようとするためのです」と。(「アフリカとアジアが共有する歴史」アルマアタのロータス賞授賞式にて。宮本正興編「アフリカ人はこう考える」より)

つづく「アラブの詩の祭り」とアフリカ映画祭から」(第Ⅱ部)も、前章を受けて、アラブ世界にお

ける詩の朗読といった大衆のなかに日常的に生きているこの地域の文学・文化の生まの姿を紹介するための、現場からの報告をかねたエッセーである。アフリカ映画についてもほぼ同様のことがいえるが、ここでは、この本全体にわたって底流をなしているテーマの一つである、この地域内部の支配・被支配と外からの植民地主義による被支配の問題ともかかわる、カースト制の問題にも触れている。アフリカにおいてもこの制度が存在したこと、またそれと芸能との結びつきについては、まだ日本ではほとんど取り上げていない問題であるが、今後の研究が待たれる。

この本の内容をかたちづくる第二の部分は、アジア・アフリカにおける現代文学を紹介している第Ⅲ部以降の部分である。(この本がアジア・アフリカ文学への入門書のような役割をも持つとすれば、この第Ⅲ部から読んでいただいてもいいと思う。)

私がアジア・アフリカの文学と接するようになってから、はやくも二十余年になる。最初一九六六年にたまたまカイロにおけるAA作家会議の準備会に出席して、この地域の文学者や文学の存在に触れ、その文学についてほとんど全く知らないことに驚いて以来、私は当時私たちにとってその中味を知る手段も方法も乏しかったこの地域の文学について、ごく少数の研究者に出会ったり、研究会を持つたりしてその内実の理解につとめ、また機会あるごとにその紹介につとめてきた。

まえがき
アフリカ、アラブ、アジアのそれぞれの地域の文学では、なにが問われているのか？ どのような時代の背景のもとに、どんな作品がかかっているのか？ この文学に見られる欧米文学とは異なった特徴はどのようなものであり、その創造力の源泉はなににもとづいているのか？ などについて、手

探りのようにしてたずねてきた文章を、この本ではその探究の経過をも結果として示しながら、地域ごとに集めている。鳥瞰的な文学状況、日本への紹介状況（その紹介の困難さもふくめて）、国際会議その他で知ることのできた文学および文学者の状況、重要な作品論、書評などの——足で歩いて知ったもの、相互交流によって理解したもの、読むことで知ったものなどについて述べた文章がふくまれている。

ところで、ここ二、三十年のうちにも、第三世界の文学とそれをとり囲む社会・政治状況は大きな変貌をとげた。第二次大戦の終った後の旧植民地からの解放と独立の時期があり、ついで政治的に独立は達成しても、旧植民地時代から受けついでモノカルチュア産業の傷や、独立の果実をむさぼりとする一握りの買弁資本家や特権階級の腐敗や墮落、そして商品を先頭にして流れこむ先進国からの一方的・一元的な価値観による文化的・生活的破壊など、いわゆる新植民地主義との闘い、いわば内部の敵との闘いが前面にでてくる時期がくる。また、その一方で、石油や貴金属、ウラン、希少金属などの資源にたいする先進国側からの世界戦略的な支配による圧力が、同時にこの地域の人びとにのしかかってくる（たとえばアラブ世界におけるパレスチナ問題、アフリカにおける南ア問題など）。そして言うまでもなく、つい最近まで存続したヤルタ体制下の烈しい東西冷戦と米ソ間の抗争が、この地域の政治経済と民衆の生活に複雑にからみあつた影響をあたえていた。

この時期、たとえばアフリカでいえば、かつて長編小説『一粒の麦』や『血の花弁』をかいてこういう事態に対抗しようとしていたダギのような作家が、さらに芸術による抵抗を一步進めて母国語による創作劇を自分の村で村人たちと上演したり、集団創造を行うフィリピンのPETAによる演劇運

動や、人種差別を告発する南アフリカのポスター演劇や、韓国における優れた民族文学の創造と並行するマダン劇運動のような「民衆文化運動」が、アフリカ、ラテン・アメリカ、フィリピン、韓国などで期せずしておこってくる。(第Ⅲ部、第Ⅴ部)

また一方では、活字文化以外の口承文学などによる伝統的文化にもとづいて、それを叙事詩や現代詩などの現代芸術の創造のなかに生かし、産業化された欧米文化には見失われている人間と自然にとつての〈価値〉を現代文明のなかで強調する、すでに述べたクネーネのような動きがある。

これらの動きは、エジプトのマフフーズや、ナイジェリアのショインカや、またきわめて最近には南アのゴードイマがノーベル文学賞を受賞するといった、これまで長い間ごく例外を除いてほとんど欧米の作家に受賞されてきた文学賞が、アフリカの作家にも与えられ国際評価を得はじめたという事態とも並行して、その足もとでおこっていることに、読者の注意をうながしたい。

まえがき

このような時代の流れにそった共時的文学・文化の動きとともに、アフリカ映画のところでも簡単に触れたようなカースト制度による同一民族内差別や、また少数民族差別といった地域の深い歴史に根ざした人間社会の問題が、芸術の伝承や外的・内的植民地政治ともからんだ問題として、アジアには存在する。第Ⅲ部のインド文学についての対談や、ベトナム文学(「東南アジアの文学」の章)についての文章などで触れているこの問題は、前にもかいたようにこの本全体のテーマの流れの底をつくっている問題である。日本の部落問題や少数民族問題、先住民族問題ともある種の対応をもち、また通底する問題でもある。このような通時と共時の落ちあう場所からは、今日なお残されている人類史的課題と、芸術伝承と創造の問題も浮かびあがってくるだろう。

さて、言うまでもないことだが、一口に第三世界の文学といっても、日本から東南アジアを経て、インド・アラブからアフリカにいたるこの広大な地域の文学と文化は、実に多様である。そしてこの多様さこそは、この諸地域の文学と文化の重要な要素であって、それにたいしての性急なまとめや、勝手な総合は、かえってそこに生きている貴重な文化の価値を見失う。この意味でも、個々の地域の言語や文化の研究にもとづいた、さらに精密で系統的な個別の文学の研究は、今後ますます重要なものとなる。そして幸いなことに、個々の地域の言語に習熟し、その文化を知ろうとする若い研究者の数も、原語から直接日本語に訳される文学作品の数も、ひと昔以前とは比較にならないほど増えてきた。日本でこの地域の文学や文化を扱うことの困難さは、日本文化の構造からいって、依然としてつきまとっているが、この本が今後の優れた研究者の誕生と、その仕事をうながす契機のひとつとなればと願っている。

私について言えば、最初一人の作家、文学者としてアジア・アフリカの作家運動に加わるという形で出発した私の立場は、アジア・アフリカの文学を読み、この地域の文学の日本文学にとつての意味を理解し、それを媒介として日本文学と第三世界の創造的交流と、共通の他者との対決をつうじて現代文学の創造をはかろうとするところにあった。この本の国々の追求も、総合的な観点も、そういう視点から生まれていると言えよう。(なお、個人的なことを言えば、私がこの時期にかいた『人間の土地』や『少年たちの戦争』などの長編小説には、表面には直接ではないが、方法的・テーマ的にこうした追求が意識的・無意識的に生かされていると思う。)

ここで本の表題にも用いている「第三世界」という言葉の意味についてひと言述べておきたい。この用語については、以前川崎で開かれた第一回 A A L A 文化会議（一九八一年）でも、その是非についてアジア・アフリカ、ラテン・アメリカの文学者たちの間で大いに議論になったことがある。「第三世界」とは、いわゆる経済的な先進国、政治的な支配国から見た言葉で、それぞれの地域にとつてはその母体となる国や文化があるだけで、なにも「第三」と呼ばれる筋合いはない、というそれなりに理由の十分な意見が、とくにアジアの幾つかの国々の文学者から出された。また、日本でも同じような意見が出たことがある。

しかし私は「第三世界」という言葉を、経済的な意味でのいわゆる先進国からみた政治・経済用語としてではなく（たとえば発展途上国という以前使われた言葉に対応するような）、文化概念として、より積極的な意味をこめて用いたい。また用いることは可能だと考える。この点、韓国の白樂晴が述べているような「第三世界とは、単純な地域概念などではなく、人類史を民衆の立場から見ようとす

る努力の表現である」という考え方に賛成する。

また、たとえばはやくも一九六〇年代に「白いアメリカ」の抵抗運動を行なったアメリカ少数民族集団は、自分たちを一括して「第三世界民衆」と呼び、その運動を「第三世界運動」と呼んだ。このように、いわゆる先進国内のマイノリティたちの中には、「第三世界インターナショナルリズム」と自らの運動を呼んだような「内的第三世界」のとらえ方があった。これは、先進国（この場合はアメリカ）の人種の抑圧が実は国内に向けられた植民地主義 (Internal Colonialism) であるとの認識からくる、と岡部一明も最近の本で述べている。（『多民族社会の到来』）この場合にも、第三世界についての

まえがき

白楽晴の定義はそのまま当てはまる。

そしてこのような意味でとらえられた第三世界の問題は、東西冷戦体制の終焉といわゆる社会主義諸国の崩壊、国家の変容と民族問題の噴出、多民族社会の到来といった事態のなかで、「先進国」内部においても今日ますます重要な意味をおびてきている。東西対立に変わる南北問題の重要性が、新しい形で浮上してきているのである。韓国については、民族文学の発展を望んで、数々の評論をかいてきたさきの白楽晴は、朝鮮の「分断矛盾は東西冷戦体制の一環であると同時に、第一世界の第三世界支配といういわゆる南北問題の産物」であり、「朝鮮民族の統一という」この明らかな可能性をさえぎっているすべての現実的制約を克服するとき、それは東西冷戦の終結でも解けなかった第三世界問題の解決——すなわち現代世界合体の問題解決に、決定的な貢献となるだろう」（『知恵の時代のために』）と述べている。

アジア・アフリカないし第三世界の文学の相互の関係は、ふりかえってみるとき、第二次大戦直後のいわば屋根と屋根との連帯、国家と国家の政治的連帯の精神（バンドン精神）にもとづいて、ともかく作家たちが集まってみるといった「共存の時代」から、お互いの文学や文化の内実を発見しあうという「共時発見コ・テイスクバリ（あるいは相互発見）の時代」へ、そして共時発見コ・テイスクバリの時代からさらに今日見られるような国家の枠組みをこえた多民族の「共生と創造の時代」と変化し、移ってきたといえよう。

この本に集めた評論やエッセーも、前著『アジア・アフリカの文学と心』に次いで、このような時代の移行と変化のなかでかかれたものだが、本書第Ⅴ部は、前著のなかの「アジア・アフリカの作家

たちとの交流」について相互交流について自由にかいたエッセーや、国際会議の記録や、対談を集めている。

この本のエッセーは、一九八五年の北海道における「世界先住民族会議」と「地球環境と日本の役割を問う国際市民会議」の二つの国際会議の報告で終わっているが、さきに述べた東西冷戦体制の終焉後の第三世界の問題は、先進工業社会の生み出す地球規模の環境破壊の進行による人類生存の危機とも正確に対応している。現在は地球規模の人類の〈共生〉が必要となり、たかだか二、三百年前に生まれた近代国家の枠組みや文化の、多民族の共生している人類社会への押しつけが、その是非を根底から問われている時代である。そして第一世界にとっての国内的・国外的な第三世界——さきに触れたいわばマイノリティによる国家や国境をこえた、いわば第三世界インターナショナルリズムの英知と文化が、各国のマジョリティが二十一世紀へむかって生きのびるためにも必要な時代となってきた。第一部でクネーネの詩や芸術思想について述べたことも、このことと対応している。

こうしたことはすべて、古来芸術がたえず暗黙のうちにも主題として示してきたもの、人類の人類自身による歴史の根源的な奪回という主題を、現在の歴史の相対のなかで示している。第三世界の文学は、産業社会と工業化文明の生み出す消費文化のなかに漂うわれわれに、現代という歴史の相をうじてこのことをさし示しているし、これからも示しつづけるだろう。

まえがき

この本が第三世界の文学の紹介といった直接の役割をこえて、来るべき、いやすではじまっている新しい時代を生きる人類にとっての拠るべき生活的・芸術的価値の在りかと創造力の源を探る、ひとつの前史的探究、ないしその緒いとぐちとなっていれば幸いである。

白楽晴の定義はそのまま当てはまる。

そしてこのような意味でとらえられた第三世界の問題は、東西冷戦体制の終焉といわゆる社会主義諸国の崩壊、国家の変容と民族問題の噴出、多民族社会の到来といった事態のなかで、「先進国」内部においても今日ますます重要な意味をおびてきている。東西対立に変わる南北問題の重要性が、新しい形で浮上してきているのである。韓国については、民族文学の発展を望んで、数々の評論をかいてきたさきの白楽晴は、朝鮮の「分断矛盾は東西冷戦体制の一環であると同時に、第一世界の第三世界支配といういわゆる南北問題の産物」であり、「朝鮮民族の統一という」この明らかな可能性をさえぎっているすべての現実的制約を克服するとき、それは東西冷戦の終結でも解けなかった第三世界問題の解決——すなわち現代世界合体の問題解決に、決定的な貢献となるだろう」（『知恵の時代のために』）と述べている。

アジア・アフリカないし第三世界の文学の相互の関係は、ふりかえってみるとき、第二次大戦直後のいわば屋根と屋根との連帯、国家と国家の政治的連帯の精神（バンドン精神）にもとづいて、ともかく作家たちが集まってみるといった「共存の時代」^{コ・エンシユテンス}から、お互いの文学や文化の内実を発見しあうという「共時発見（あるいは相互発見）の時代」^{コ・デイスカバリ}へ、そして共時発見の時代からさらに今日見られるような国家の枠組みをこえた多民族の「共生と創造の時代」と変化し、移ってきたといえよう。この本に集めた評論やエッセーも、前著『アジア・アフリカの文学と心』に次いで、このような時代の移行と変化のなかでかかれたものだが、本書第Ⅴ部は、前著のなかの「アジア・アフリカの作家

第三世界の文学への招待
目次

目次

まえがき

I アフリカ文化の使者マジシ・クネーネ

アフリカ文化の使者マジシ・クネーネ 5

——クネーネ訪日記・1983

1 黒いノートと長崎の蟬 8

2 十三年ぶりのクネーネ 19

3 東伏見神社にて——西欧・アフリカ・日本 33

4 アフリカ伝統詩の朗読と上演 リトイタル
パフォーマンス 52

アフリカにおける家族と宇宙観 81

——アフリカ思想体系の背景

クネーネとの対話 97

——象徴の根源的現実性とアフリカ共同体

マジシ・クネーネと現代文学 115

——アフリカ文学とはなにか

II アラブの詩の祭りとアフリカ映画祭から

——(附)中東戦争と湾岸危機をめぐって

アラブの詩の祭り 143

——バグダッドの“ミルバッド”詩祭に加わって

(附)中東危機と湾岸戦争をめぐって 159

アフリカ映画祭を観て 177

——民衆の心生き生きと・内部矛盾にも鋭いメス

アフリカ映画「恋人たち」をめぐって 181

——アフリカにおけるカースト制度への挑戦

III アラブ・アフリカ文学への招待

アジア・アフリカの文学動向 197

——展望として

アラブ

現代アラブの文学状況——『現代アラブ文学選』の発刊をめぐつて 207

アラブの詩と風土 224

シャルカーウイの長編小説『大地』について 233

『現代アラブ小説全集』を読んで 252

海外文学の潮流—アラブ——「南北」考える芽育つ・伝統と近代化の間で苦惱 259

タイーブ・サーレフ『北へ遷りゆく時』——北アフリカ青年の宇宙的苦惱 262

『ロータス』の創刊 265

アフリカ

アフリカの文学と心——生命と文明の危機に示唆も 271

アフリカ文学の紹介に広がり 274

『現代アフリカ文学短篇集』ⅠⅡⅢ 277

ナディン・ゴードイマ『戦士の抱擁』——人種差別を告発する小説集 279

マジシ・クネーネとグギ・ワ・ジオンゴ——アフリカにおける政治と文化の関わり

282